

P1-75

在宅訪問栄養指導により栄養状態が改善した一例

山本美里¹、中野まいか²¹JCHO若狭高浜病院 栄養管理室、²JCHO金沢病院 栄養管理室

【目的】 独居の高齢者にとって、退院後も自宅にて入院中と同じ水準の安定した食生活を送ることは難しい。今回、退院後に在宅訪問栄養指導として管理栄養士が介入し、栄養状態が改善することができた症例を経験したため、報告する。

【方法】 アルコール依存症で低栄養状態のために入院を繰り返す76歳独居の男性A氏。退院後、低栄養改善目的のため管理栄養士による月2回の在宅訪問栄養指導を実施した。

【成績】 退院1週間後に訪問し評価したところ、A氏は飲酒が増えることで食欲が低下するため禁酒を指導する必要があり、朝食と夕食は面倒になり摂取しない可能性があったために3食食べる必要性について本人に指導を行った。また血圧高値であったことから、本人とヘルパーに対しても減塩と調理内容について指導を行った。息子様やヘルパーと随時情報を交換できるように連絡ノートを作成した。また本人が簡単な調理ができたため、訪問時には簡単に作れる料理のレシピを提案した。介入して半年がたったころには、本人より「アルコールに偏っているとあかん。食事は大事なんやな。」という声が聞かれた。退院時の身長が153.3cm、体重が53.8kg→61.4kgに増え、下腿周囲長も右29.4cm→32cm、左30.5cm→32.1cm、AIBは2.2g/dl→3.1g/dlまで改善することかできた。さらに介護度は要介護2から要介護1へと改善した。

【結論】 退院後から在宅生活での食事内容について管理栄養士が介入し、本人への栄養指導や、連絡ノートを利用し息子様やヘルパーとも改善点や注意点を共有しながら取り組んだことで、栄養状態を改善することができた。今後の課題としては、介護度が良くなったことでヘルパー等の介入が減り、さみしさから飲酒量が増えてしまう可能性が高く、在宅訪問栄養指導を通して食事の大切さについて継続して支援を行っていく必要がある。

P1-76

強化型老健施設+充実したリハの介入により、生活機能向上が認められた一症例
～症例から見えた効果と課題～

赤岡智行、佐藤和也、推名翔太、高見奈津子、川口友恵

JCHO二本松病院附属介護老人保健施設

はじめに 昨年7月より当施設は、全国で7%程度しかない在宅強化型の超強化型老健施設としてスタートした。この超強化型は「高水準で在宅復帰」「喀痰吸引や経管栄養や介護度の高い方の受け入れ」「他職種で入退所前後訪問指導」等10項目の指標による要件を満たし、さらに「退所時指導や状況確認」、「週3回以上の充実したリハビリ」などをクリアで承認される。今回、当施設に入所中の充実したリハビリと介護福祉士の適切な環境セッティングにより、離床時間が増えADL向上に至ったことを報告する。

症例紹介 名前S・T様、女性、87歳。病名：上下部消化管出血、アルツハイマー型認知症。経過：H30年10月午後自宅トイレにて夕方まで悪心及び下血出現、当院入院となる。入院中は誤嚥性肺炎、腎機能低下による意識状態低下があったが、加療にて回復、その後2週間のリハビリを行うが、全介助にて当施設に入所。当施設でのPT評価は、寝返りから座位、移乗全介助。車椅子座位仙骨すわりにて可能。歩行不可。身体機能評価は右下肢軽度の不全麻痺、腓骨神経麻痺症状。左下肢中等度の不全麻痺症状を確認。経過：2軸動作歩行と右下肢に左下肢とに脚長差をつけ平行棒歩行訓練を開始。その後四脚歩行器、つかまり杖、介助杖歩行訓練に移行。同時に介護福祉士・看護師による入所部屋では、S・Tがベッドから車椅子移乗動作まで安心して出来るように、床に滑り止めマットの設置、車椅子への移乗が安全に行える車椅子の配置。これにより、S・Tは離床時間を多く持った。

考察 今回の歩行獲得は2軸動作と脚長差を付けて麻痺側下肢の振り出しを容易にし再学習されたことが杖歩行訓練まで至ったものと考えられる。同時に、介護福祉士による「匠」の環境セッティングにより利用者の離床時間が向上したことも要因と考える。今後もニーズに応じてリハビリ専門職、介護福祉士などの複数で対応し生活機能向上に努めたい。

P1-77

当施設デイケアにおける歩行意欲向上のための取り組み
～1日平均歩行距離の推移～

宮嶋厚歩、江村匠史、三輪菜穂子、山本紗季、中寺寿里、柳内百合香、米田美登里

JCHO金沢病院附属介護老人保健施設 リハビリテーション科

【はじめに】 当施設デイケアでは、利用者が安全に在宅生活を継続していくため、心身機能の維持・向上を目標とした様々な取り組みを行っている。今回、利用者がリハビリの時間に行う歩行練習に着目し、歩行意欲向上のための取り組みとして、歩行路の整備と歩行距離のフィードバック方法の検討を行った。また、効果の検証のため、歩行路整備前と整備後の歩行距離を比較した。

【方法】 期間は平成30年10月から平成31年3月。対象は自立歩行が可能であり、歩行路整備前から歩行練習を行っていた利用者22名。歩行路は80m、35m、25mの3種類を設定し、利用者の身体機能に応じて選定した。また、歩く方向を統一し、安全面に配慮して十分な歩行スペースを確保した。計測方法として、用意したホワイトボードに利用者自身が歩行路を周回した回数を記録し、1ヶ月毎に平均歩行距離と総歩行距離を算出した。総歩行距離は、1ヶ月毎に利用者によりフィードバックし、翌月の目標を設定した。その後、事前に調査した歩行路整備前の1日平均歩行距離と、整備後の6ヶ月間の1日平均歩行距離の推移を比較、検討した。

【結果】 歩行路整備前と比較して、整備後1ヶ月目は、1日平均歩行距離の大幅な向上を認めた。その後は緩やかながら、月毎に平均歩行距離の向上を認めた。また、歩行路整備により、多数の利用者が同時に歩行練習を行えるようになった。新規利用者に対しても、歩行路の説明が容易になり、効率的に歩行練習への導入が行えるようになった。

【考察】 歩行路を整備したことで、多数の利用者が安全でスムーズに歩行できるようになったと考える。また、歩行距離のフィードバックにより、歩行距離を利用者自身が把握し、他者と比較することが可能になったことや、利用者同士のコミュニケーションが生まれ、具体的な目標設定が可能になったことが歩行意欲の向上に繋がったと考える。

P1-78

地域中核病院でのCEの在宅医療への関わり
～在宅人工呼吸管理セミナーの取り組み～

竹村真也、櫻野哲寛、元茂拓和

JCHO神戸中央病院 臨床工学部

【目的】

当院は地域の中核病院として運営しているが、CEが在宅医療へは携わることが出来ていないのが現状である。そこで人工呼吸器の取扱いやトラブル対応を主にしたセミナーを企画・開催することで在宅医療へ関わり、安全な在宅人工呼吸管理に寄与し地域医療の推進・活性化を図ることが出来るのではないかと考えた。

【方法】

当院の位置する兵庫県神戸市北区内の訪問看護ステーションに勤務している医療従事者を対象としたセミナーを院内の会議室で開催した。セミナー内容は各訪問看護ステーションへ事前アンケートを送付し、関心の有無や必要とされている内容についてリサーチを行った。また在宅人工呼吸に携わっているディーラの協力を得て実際の在宅用人工呼吸器を用いたデモンストレーション等も実施した。

【結果】

セミナー参加人数は18名で、職種内訳は看護師16名、理学療法士2名であった。今回が初開催であったが申込締切前に定員数を超過する申込があり、在宅医療の現場では人工呼吸器管理セミナーへのニーズが高いことが伺えた。在宅医療に携わるスタッフと共に実習と座学を通じ顔の見える関係になり、一緒に語らう時間を共有し在宅医療の現場からの声を直接伺うことができたことは有意義であり、このセミナーを通じて各施設間のネットワークを広げることができた。

【結論】

セミナーを開催してきて、安全・快適な在宅人工呼吸管理の推進の為にCEの積極的な関与が現場より求められていると感じた。在宅医療において居宅訪問まで行っているCEは多くはない、しかしセミナーを通して地域と連携し安全で快適な在宅人工呼吸管理を提供することが出来たため、こうした取り組みが今後CEの在宅医療へ参与していくきっかけになるのではないかと考える。